

# Discourse Analysis of Osamu Dazai and the Literary Field —Reconsidering the research object and the research methods

MATSUMOTO Katsuya

## Abstract

This paper presents discourse analysis on reviews of two books of monographs that I have published.

Twelve book reviews on *Osamu Dazai of around 1935: Adolescents, Media and Text* and *An Inquiry into the Literary Field in the Second Decade of the Showa Era: Newcomer, Osamu Dazai and War Literature* are considered in this paper.

A series of book reviews uncovers interesting issues about research subjects and methodologies in modern Japanese literary research.

In this paper, firstly, I review the research trends since the 1990s. Secondly, I analyze the issues and the rhetoric of six book reviews on *Osamu Dazai of around 1935: Adolescents, Media and Text*. Thirdly, I analyze the issues and the rhetoric of six book reviews on *An Inquiry into the Literary Field in the Second Decade of the Showa Era: Newcomer, Osamu Dazai and War Literature*. Finally, I summarize the whole discussion and describe the research prospects.



# 太宰治／文学場の言説分析

## ——研究対象―方法論再考のために

松 本 和 也

### I

本稿は、太宰治／文学場について検討するための一つのアイディア＝視点として、拙著に関する書評を対象として検討を試みるものである。組上にのせたのは、拙著『昭和十年前後の太宰治 〈青年〉・メディア・テクスト』（ひつじ書房、二〇〇九・三）と『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』（立教大学出版会、二〇一五・三）に対する書評であり、それらを対象とした言説分析が本稿の課題である。その上で、ここでのねらいは、本稿での検討を通じて研究対象―方法論再考の契機をとりだすことにある。

本稿は、これらの書評に対する著者からのエクスキューズでもなければ、（誠実な／批判的な）応答でもなく、ましてや自著に対する事後的な補遺でもない。本稿が、単なる自己愛的な記録以上の意義をもち得ると思考したのは、特定の研究対象に対して特定の研究方法でアプローチを試みた拙著二冊に関する言表―評価が、単にその

ことにとどまらず、研究状況や認識、受容の振幅やアクセントといった言説（配置）を通じて、日本近代文学研究（の研究対象―方法論）に関する状況を浮かびあがらせているように映じたからである。

というのも、拙著もそれらに対する書評も、個々の書き手の著作物であると同時に（より以前に）、太宰治研究／日本近代文学研究（史）といった場の産物でもあるのだから。その意味で、本稿における拙著の位置は、言説の結節点たるトピック以上でも以下でもなく、それに関わる言表として、それぞれの書評は分析対象であり、その集合は言説―言説編成と見立て得る。本稿で言説分析の対象とするゆえんである。

ここで、拙著に対する書評をご執筆下さったみなさまに、この場をお借りして、あらかじめ／改めまして、心からの御礼を申し上げます。

## II

本論に先立ち、拙著執筆の直接的／間接的な前提ともなった、近年の太宰治研究および日本近代文学研究の状況―展開について、祖述しておく。

まず、太宰治研究について振り返ってみよう。

すでに先学として、山内祥史、相馬正一、東郷克美、鳥居邦朗、渡部芳紀らによる研究成果が、書誌、評伝、作家・作品論として蓄積されていた。そこに、『初出版 太宰治全集』（筑摩書房、一九八九・六―一九九二・四）が整備され、さらに定期的といってよい雑誌『国文学』・『解釈と鑑賞』などの太宰治特集がくわわる。研究

書でいえば、著書の一部に太宰論を収めた、鈴木貞美『昭和文学』のために『フィクションの領略』（思潮社、一九八九・一〇）、安藤宏『自意識の昭和文学 現象としての「私」』（至文堂、一九九四・三）、中村三春『フィクションの機構』（ひつじ書房、一九九四・五）が上梓され、研究基本図書として、神谷忠孝・安藤宏編『太宰治全作品研究事典』（勉誠社、一九九五・一一）、山内祥史編『太宰治著述総覧』（東京堂出版、一九九七・九）なども公刊された。

その後、一九九八年に太宰治没後五〇年を迎えたこともあって、山崎正純『転形期の太宰治』（洋々社、一九九八・一）、三谷憲正『太宰文学の研究』（東京堂出版、一九九八・五）、細谷博『太宰治』（岩波書店、一九九八・五）といった太宰論にくわえて、テレビと連動した長部日出雄『NHK人間大学 太宰治への旅』（日本放送出版協会、一九九八・一）の刊行、雑誌特集としては「特集 太宰治 没後五〇年」（『解釈と鑑賞』一九九八・六）、「総特集 太宰治 没後五〇年記念特集」（『ユリイカ』一九九八・六）の二冊が組まれた。こうして、一九九〇年代末には、太宰治ブームは研究領域にとどまらない隆盛をみていた。

そうした厚みの中で、二〇〇〇年代に入っても、研究書は続々と刊行されていた。木村小夜『太宰治翻案作品論』（和泉書院、二〇〇一・二）、服部康喜『終末への序章 太宰治論』（日本図書センター、二〇〇一・三）、東郷克美『太宰治という物語』（筑摩書房、二〇〇一・三）、花田俊典『太宰治のレクチュール』（双文社出版、二〇〇一・三）、安藤宏『太宰治 弱さを演じるということ』（筑摩書房、二〇〇二・一〇）といった具合である。他に、太宰治研究への貢献が見逃せない、青森県立図書館・青森県近代文学館編『資料集』（青森県近代文学館）の刊行も、二〇〇〇年二月からはじまっている。ちなみに、松本和也が大学院博士課程在学中に太宰治論を発表

しはじめたのは、二〇〇一年のことである。

次に、二〇〇〇年代以降の、日本近代文学研究領域における方法論に関する議論の輪郭を共有するために、『文藝年鑑』の「日本文学（近代）研究」欄を参照しておこう。同欄は、原則として過去一年間に発表された日本近代文学に関わる研究書等の紹介と短評によって構成されているが、二〇〇〇年前後には研究動向に関わる記述が集中的にみられた。

議論の前提を把握するために、九〇年代末の曾根博義「日本文学（近代）研究<sup>97</sup>」<sup>4</sup>から参照しておこう。《文学の社会的地位の低下、大学の文学系学部・学科・科目の縮小、再編、解体など、日本近代文学研究を取り巻く環境は年々厳しさを加えているが、文学研究そのもののなかでも最近「文学」離れの現象が著しい》と、文学（研究）内／外の環境変化にふれた上で、曾根は《率先して新たな領域と方法を切り拓こうとした注目すべき研究》として小森陽一・紅野謙介・高橋修編『メディア・表象・イデオロギー 明治三十年代の文化研究』（小沢書店、一九九七・五）をとりあげ、次のように同書を論評していく。

「明治三十年代の文化研究」という副題からも、「文学・歴史・社会を横断する言説研究の最先端」「グローバルな視野に立つ気鋭による共同研究―近代日本の形成」というオビのコピーからも、またスキャンダル記事、ツーリズム、水道、精神病者、家庭小説、メディア・ミックス、少女小説、「国語」と「文学」、作文教育、女子教育、植民地主義といった多彩なトピックスからも明らかなように、「文学」離れは意図的、戦略的である。「あとがき」（高橋修）によると、それは現在の社会一般や大学における文学の地位低下と無縁で

はないという。かつての作品論・作家論に取って代ったテキスト分析の自閉性からの脱出という研究の内側からの要請もあったが、「既成の社会構造や〈知〉の枠組み、また文学神話そのものが揺らぐなか、文学を研究することの意味がかつてのように無前提に見出せないでいること」もあって、「文学テキスト解釈主義から文学に限定しないトータルな言説の研究へ」と関心が向い、「テキスト理論の達成を文化研究に接続する」ことを目指したという。研究の対象を文学以外の言説にまで拡げることによって、社会学者や歴史学者の研究とも、従来の文学テキストの研究とも違った、独自の「カルチュラル・スタディーズ」が可能なのではないかという考えのようだ。

その二年後、やはり《一九九〇年代の後半は、日本の大学から国文学科というのが、一部の私立大学をのぞいてほぼ消えてしまった時期として記憶されることになる》と文学研究に関わる環境の劇的な変化に論及しながら、《それと併行するように、文学研究（特に近代文学）<sup>6</sup>の方にも文学<sup>カルチュラル・スタディーズ</sup>研究の波がおしよせて来た》というのは「日本文学（近代）研究<sup>99</sup>」の東郷克美である。

国民国家論、文学主義批判、ジェンダー研究のうねりの中で、従来の文学研究の偏向・限界がいわれるようになり、それが文部省の大学（特に人文系）改組・再編成の企図と奇妙なかたちで結びついてしまった。それは文化研究が本来もっていた批評性とは無関係に、より皮相なレベルでそれが受けとられ、その大半が安易な注釈的研究や背景研究に終始しがちであるという実情ともどこかでつながっているように見える。

さて、近年の近代文学研究書に顕著な傾向は、作家名を冠したものが少なくなってきたことである。それは研究の関心が、個別の作家や作品に求心的に向かうのではなく、歴史や時代状況のコンテクストの中で作品を読もうとする方向に動いていることを端的に示している。

こうした見方は、翌年の「日本文学（近代）研究<sup>00</sup>」にもひきつがれ、ここで東郷克美は《文学研究はいよいよ文化研究の方向にシフトしつつある》という現状認識を、《これも情報革命の波と無関係にあらわれたものはあるまい》と、やはり、文学（研究）内／外の環境変化と連動したものと把握し、言表し、具体的な表徴として、金子明雄・高橋修・吉田司雄編『ディスクールの帝国 明治三〇年代の文化研究』（新曜社、二〇〇〇・四）に論及している。東郷は同書について、《まさに文学を含む同時代の文化現象とその言説をジャンル越境的にさまざまな角度から分析し》、《個々の論は、それぞれに面白く読んだが、このような研究は、最終的にはどのような全体像・着地点をめざすのだろうかと考えこまざるをえなかった》と、要約し所感を示している。つづく安藤宏「日本文学（近代）研究<sup>01</sup>」<sup>8</sup>もまた、研究動向Ⅱ文化研究という論点をひきつぐかのように展開されている。

「日本」と「文学」。この二つのことばの組み合わせが、今、あらためて問い直されている。これらはいずれも近代国家の要請のもと、明治以降にあらたに再構成された概念であり、それらを検証することによって一國文化主義を相対化することが可能になるのではないか、というのが発想の根拠である。こうした国民国家

論的な問題意識がメディア論、ジェンダー研究、ポスト・コロニアル批評などとも連動し、広義の文化研究（カルチュアル・スタディーズ<sup>ママ</sup>）を形成してきたのがこの数年の流れであり、本年もまたその功罪がさまざまな側面で表れた一年であった。

《「文化研究」の飽和現象は早くも随所に目立ち始めているようだ》と判じる安藤は、《個々の言葉の強度を状況との作用・反作用の中で明らかにしていく視点が欠落したとき、表象論はかぎりなく決定論、反映論へと傾斜していく》という評価軸を示した上で、《状況が言葉を生み出し、その言葉が状況を変革していく相互関係を具体的に指さしてくれる論考は興味深いし、そうでないものはたとえいかに多彩な題材を選んだとしても出てくる結論は紋切り型になってしまう》と両極の方向性を示し、《おそらく課題は狭義の「文学主義」と、機械的な「表象」信仰とを止揚する第三の道にこそあるはず》だと展望を示していた。

翌年の「日本文学（近代）研究<sup>9</sup>」においても安藤宏は、《「文学研究」自体の歴史性を振り返る試みも本年の特色の一つで、現在が研究の過渡期にあることをあらためて実感させる》と研究動向を書き記しながら、その表徴として安田敏朗『国文学の時空 久松潜一と日本文化論』（三元社、二〇〇二・四）を例示していた。

これ以降、「日本文学（近代）研究」欄で、文化研究などの研究動向に紙幅が割かれることはなくなっていく。むしろ、社会／大学における文学（研究）領域に関する負の展開が言及されていく。「日本学会事務センター」の破綻<sup>10</sup>、《この十数年つづいてきた「近代文学」研究をめぐる環境の変化<sup>11</sup>》、『国文学』の休刊など<sup>12</sup>、記すべきことはいくらでもある。

以上を振り返ってみれば、二〇〇〇年前後には、研究成果が紹介される「日本文学（近代）研究」欄において、研究動向として文化研究が複数年にわたって取り沙汰されていたのが、特徴の第一である。その際、個別の研究にとどまらない射程でその可能性／限界が、現状／見通しとして論じられていたことが特徴の第二。また、それが、文学（研究）内／外の環境変化と連動した傾向として位置づけられていたことが特徴の第三といえよう。

付言しておけば、二〇〇〇年前後に活字として公表された研究成果にしても、それとの関連性が言及されていた文学（研究）をめぐる環境の変化にしても、水面下には前史とでも称すべき時期があっただろうことは想像に難くない。前者について、活字化されたものとしては、雑誌特集「メディアの政治力——明治四〇年前後」（『文学』一九九三・四）と「メディアの造形性」（『文学』一九九四・七）、単著論文ならば高橋修「ジャンルと様式——日清戦争前後」（『日本近代文学』一九九四・五）、大野亮司「神話の生成——志賀直哉・大正五年前後」（『日本近代文学』一九九五・五）などをその具体的な表徴とみることができるし、社会学の領域からは、遠藤知巳による「言説分析とその困難——全体性／全域性の現在の位相をめぐって」（『理論と方法』二〇〇〇・六）などの理論的貢献もみられた。こうした動向の延長線上に、二〇〇〇年代における研究状況は形成されていたのである。

### Ⅲ

松本和也『昭和十年前後の太宰治 〈青年〉・メディア・テキスト』（ひつじ書房、二〇〇九・三）は、「あとが

き」に読まれるように、《二〇〇五年度に立教大学に提出した博士論文『太宰治論——〈青年〉・メディア・昭和十年前後』を《原型》としつつ、《扱う期間や作品、つまりは章立てを大幅に変えた》研究書である（以下、同書を著1と略記する）。

著1の問題意識は、書き下ろしとして冒頭に配された「序 〱太宰治〱へのアプローチ——太宰神話・青年・戦略」に示されている。タイトル・サブタイトルには明示されていないものの、議論全体の前提となっている《太宰神話》について松本は、《個人によって多様な、その上、本来抽象であるはずの作家像を実体（論）的に思い描きながら、作中人物と現実世界の作家とを素朴に重ねあわせ、かつ、そのことを自明の前提とする読解枠組み》だと定義した上で、著1のコンセプトを次のように示している。

本書は、偶像破壊それ自体を目指して 〱太宰神話〱 に異を唱えるのではない。そうではなく、〱太宰神話〱 がいつ、どのように形成されたのか、そこにはどのような力学が働いていたのか——こうした一連の問いを立て、神話にもぐりこむような場所から、それに関わる同時代の言説を分析し、記述していくこと。こうした作業は、少なくとも、普遍的に語られるそれとは異なるかたちで、いうならば歴史的な相貌において太宰治を描き出すことに道を開くだろうし、そのことで作家神話形成の過程や力学の対象化が可能ならば、そこから 〱太宰神話〱 に包まれた作品を読むための新たな視界が開けてもこよう。従って、本書が目指すのは、〱太宰神話〱 を内破するための道標たらしめとする新しい作家論である。

右のような戦略に即して、著1では《根を一つとした、二つの問題領域》が設定され、部立て構成と方法論が次のように示される。

一つは主に「Ⅰ 〈太宰治〉はいかに語られてきたか」で前景化される、<sup>1</sup>太宰神話<sup>2</sup>と直接的に関わる作家像の問題、もう一つは主に「Ⅱ 〈太宰治〉の小説テクストを読む」に通底する、太宰治という署名を付された小説を対象とした、テクストの読み直しである。(時期が下る「Ⅲ」では、双方の観点を組みあわせた。)それに応じて、複眼的に二つのアプローチを採る。一つは言説分析、もう一つは構造言語学の成果に基づくテクスト分析で、本書ではそれぞれ対象や局面に応じてアレンジしたアプローチを試みた。いずれも、本書にあつては方法(論)というより、太宰治を考え直すステージを新たに準備するための手がかりとして、戦略的に導入したものである。

ここで著1の目次を掲げておく。なお、各章タイトルの末尾には、ベースとなった初出論文の発表年を西暦で付した(書き下ろしの場合は執筆年)。

序 <sup>3</sup>太宰治<sup>4</sup>へのアプローチ——太宰神話・青年・戦略(2008)

第Ⅰ部 〈太宰治〉はいかに語られてきたか

第一章 〈苦悩する作家〉の文壇登場期——メディアの中の作品評・失踪事件(2001)

第二章 〈新しい作家〉の成型——第一回芥川賞と氾濫する作家情報 (2001)

第三章 青年論をめぐる〈太宰治〉の浮沈——「ダス・ゲマイネ」受容から (2002)

第四章 「同じ季節の青年」たること——「虚構の春」をめぐる作家情報／作家表象 (2001)

第五章 〈性格破綻者〉への道程——『晩年』・『創生記』・第三回芥川賞 (2002)

## 第Ⅱ部 〈太宰治〉の小説を読む

第六章 反射する〈僕—君<sup>シフタ</sup>〉、増殖する〈青年〉——「彼は昔の彼ならず」(2005)

第七章 黙契と真実——「道化の華」(2003)

第八章 小説の中の〈青年〉——「ダス・ゲマイネ」(2001)

第九章 〈青年〉の病≡筆法——「狂言の神」(2006)

## 第Ⅲ部 〈太宰治〉、昭和十年代へ

第十章 言葉の力学／起源の攪乱——「二十世紀旗手」(2006)

第十一章 再浮上する〈太宰治〉——「姥捨」受容と昭和十三年 (2005)

こうした構成について松本は、『本書の「Ⅰ」と「Ⅱ」とは、地／図、でもなければ、図／地、の関係にあるのではない』、『Ⅲ』も含めて本書を貫くのは、青年という歴史的な主題を見据えつつ、昭和十年前後の太宰治を考え直すというモチーフであり、それぞれの対象や局面に応じて戦略的なアプローチを試みながら、太宰治をめぐる言葉／歴史を読むことこそが、本書のねらい』なのだと言明している。

同書について、まとまった分量をもつ書評としては以下の六本が確認できた。論述の便宜上、それぞれ1①～1⑥と略記し、引用に際しては亀甲括弧内に略記号を示す。

1①……中村三春「文芸現象に対して総合的に取り組もうとする高い意欲が示される」(『週刊読書人』二〇〇九・五・二九)、四面。

1②……池内輝雄「〈太宰治〉とは誰か? 歴史の場から復元した新作家像」(『図書新聞』二〇〇九・八・八)、四面。

1③……山口俊雄「松本和也著『昭和十年前後の太宰治——〈青年〉・メディア・テキスト』」(『日本近代文学』二〇〇九・一一)、四〇五～四〇八頁。

1④……細谷博「松本和也著『昭和十年前後の太宰治——〈青年〉・メディア・テキスト』」(『日本文学』二〇〇九・一一)、八六～八八頁。

1⑤……山口浩行「松本和也著『昭和十年前後の太宰治——〈青年〉・メディア・テキスト』」(『昭和文学研究』二〇一〇・三)、一四七～一四九頁。

1⑥……山根龍一「松本和也著『昭和十年前後の太宰治——〈青年〉・メディア・テキスト』」(『太宰治スタディーズ』二〇一〇・六)、一八六～一八七頁。

これら書評上で議論された論点は、主に、A 研究書全体、B「I」について、C「II」について、D 方法論に

ついて、E特に『太宰神話』や作家像／作家主体に関する構えについて、の五点で、それが各評者の前提や評価を関数とした著1読解の帰結として、いりまじりつつ言表されていた。その意味で、先にその一部を引いた「序」太宰治へのアプローチ——太宰神話・青年・戦略」を正面から受けとめた書評が並んだことになる。

皮切りに、最初に公表された書評〔1①〕から、そこで示された総評を引いておく。

本書は、副題のキーワード「青年」を蝶番として、太宰治という「作家表象」をめぐる文壇と読者の「言説編成」の追究と、個々のテキスト分析を通じて小説構造の析出とが嵌め合わせられた、一種の力技である。

一方では最近普及している実証的な文献踏査に依拠した言説研究、他方では語り論をはじめとする理論的なテキスト読解の手法を統合して、文芸現象に対して総合的に取り組もうとする、高い意欲が示された好著である。（傍線引用者、以下同）

より具体的にいえば、〔1①〕では『第一部第Ⅱ部とも、全く完璧に新しい見地というわけではない』、『だが、これまで漠然と想像されていたその実態が、必要十分な理論と実証に基づいて目の当たりに再構成される達成には、感嘆を禁じ得ない』と、評されており、著1評価の上限といえそうである。論点としてはB、CにDをくわえてAとした言表である。もとより、Bについては『苦悩する作家』としての太宰のイメージが、いかにして発生し、増幅され、そして定着していったかを、文壇言説と作品の評価に即して丹念に検証する『、Cについては『これは単純なテキスト分析ではなく、環境と個体との間のオートポイエティックなプロセスの把握なのだ』

と、その具体的な手続きも要約・評価されており、それが右のAへと結実している。これを一つの基準として、他の書評も検討していこう。

実は、「1①」では、ことさらにクロージアアップされることのなかった論点Eが、他の書評では肯定／否定といった両極の立場から、一定の紙幅を割いて論及されていた。

「1②」では、著1の議論を受けて、その書評の枕に次のような議論を配置する。

太宰治に関する限り、はたしてバルトやエーコはどれだけ理解されたか。というより、一般に「私」性に基づく作品（「私小説」がその顕著な例であるが）では、実体的な作者と、作品中の作者をモデルにした（と思われる）人物とが分かちがたいせいか、あいかわらず、その腑分けをあいまいにしたままの作者・作品論が横行している。

こうした、日本近代文学研究における作者論に関する現状認識を素描した上で、《松本和也は、まず「太宰治とは誰であるか、何であるか」という、ほとんど自明のような問いかけから始める》と、著1のスタートラインを解説してみせる。《「太宰治神話」が抜きがたく作品にしみついていることを問題視する》がゆえに、《松本は注意深く、太宰を〈太宰治〉と呼び、実体的な作者と区別する》、《そのうえで、作者像が形成される昭和戦前期に焦点を合わせ、同時代の社会・文化、メディア、文芸時評などの動向と連関させ、〈太宰治〉像の推移を追跡する》、《松本は歴史の現場に〈太宰治〉を立たせ、自らもそこに立つことによって「神話」とは別の、時代・文

学の先端を進もうとしていた〈青年〉作者像を導き出す」、と著1「I」での議論を要約した上で、『資料を博捜し、吟味し、積み重ねてゆく実証的な方法は説得力があり、追跡はスリリングでさえある』とその議論を評価している。

ここには、著1「I」を評す際に、その前提として作者論・太宰治研究の現状を参照し、「I」の議論を吟味し、それに対する評価を示す、という書評言説の基本形が示されている。もともと、「1②」においても、「II」は『作品（テキスト）』の解説』であり、『新鮮な〈太宰治〉像が提示される』という短評がみられ、テキストの読解成果ではなく『《太宰治》像』が読みとられている以上、「I」の延長線上で（ということとは、すなわち著1「序」の目論見通り）「II」も受容されていたことになり、著1の評価ポイントは「I」に置かれている。まとめておけば、「1②」では、D・EとBを重ねて論評し、そこにCを添えることでAに代えているのだ。こうした構成の内に、「1②」ではEが肯定的に評価されている。

類似した構成によって著1を積極的に評価したのは「1⑤」で、作者論と重ねながら太宰治研究の状況を、著1理解・書評の前提として、ていねいに提示する。

読書行為において作者にどの程度の役割を負わせるかという議論となる以前に、作者の情報の過剰な氾濫は、いわゆる〈作家神話〉を作り出して、読解の枠組みに様々な歪みをもたらしてしまう。中でも、〈太宰神話〉は強固であり、太宰の読者は、その読みの妥当性を実体としての太宰治に帰す傾向が強かった。こうした弊害を回避するには、作者を一切遮断するか、どこかで妥協するかしかない。だが、ひとたび作者を参

照粹に使用したとたんに、作中人物の「私」と、言語表現の主体と、作者名に記された「太宰治」と、生身の本名津島修治なる人物との境界が溶解していく。作品を論じているつもりで、太宰治の〈意図〉に帰着する読みが、稿者も含めていかに多かったか。太宰研究の最大の敵が、作者太宰治だという皮肉な事態になっていたのである。

その上で、《松本氏は、従来太宰治を考える上で多用されてきた枠組みには容易に頼ろうとしない》、《少しでも実体（論）的な作家を召喚する危険性のある「道化」や「演技」などの「太宰治なる作家をメディア・パフォーマーと認めたくなる格好の疑似餌」は斥け、伝記研究の成果にも安易に依拠することはない》と、議論に課された条件を明るみにだしつつ、《直接同時代言説を掘り起こし、歴史的な条件下に成立した概念として〈太宰治〉を捉える松本氏の姿勢は徹底している》と、その方法・姿勢を指摘しながら肯定的に評価していく。さらに、《そもそも、〈太宰神話〉を「疑いながらも、やはり太宰治について考え直す」というこの慎重さゆえに、〈太宰治〉に無自覚で来た太宰論に転換を迫る本書が、説得力を持つのだろう》と、《禁欲的に視座を絞り込》んだ《成果》を研究史に位置づけている。このように、「1⑤」では、Eをていねいに論評しながらAをDへと結びつけている。

逆に、「1③」・「1④」・「1⑥」は、Aに関しては一定の評価をしながらも、Eに関しては否定的な言表となっている。まずは、「1⑥」から、B・D・Eを論じることAに代えた一節を引いておく。

三部構成をとる本書の最大の見所の一つは、全五章からなる「第Ⅰ部〈太宰治〉はいかに語られてきたか」であろう。そこでは「太宰治」という作家表象が、昭和十年前後の「青年」という問題系と切り結びつつ、メディア上でどのように形成されていったのか、その歴史的過程が具体的に再構成され、丹念に検証されている。いわゆる言説分析のアプローチをとる論証の精密さを裏打ちするのは、各章の注の数から端的にうかがえるような、同時代言説を能うかぎり網羅的に蒐集した圧倒的な情報量にほかならない。

その上で、「1⑥」ではEに関して、『作家主体に言及することの当否について』というかたちで疑義が呈され、『私は、著者に半ば共鳴しつつも、ある違和感を最後まで拭い去れなかった』、『なぜなら、著者が再三「実体的な太宰治」という表現で先行論などに批判的に論及する際、その矛先が、実作者としての作家主体を想定すること一般に向けられているように感じたから』だという。『個々の作品本文の具体的な分析を出発点にして、論者が帰納的に各々の作家像を立ち上げることは、はたしてそれほど警戒すべきことなのだろうか』という「1⑥」の言表が、著Ⅰの作者論に関わる理論的設定に対する否定的な言及であることは確かである（右の疑義が著Ⅰ全体／「Ⅱ」のみ、いずれに向けたものかは判断不可能）。これに類似した批判は、はやくは「1③」で展開されてもいた。

「1③」は分量的な長さゆえもあつてか、著Ⅰのポイントをていねいに検討する書評となっている。「Ⅰ」について『文壇の言説編成の中で〈太宰治〉が生成して行くさまが説得的に示される』と、「Ⅱ」についても『一作品ごとに一応議論が完結するという形を取らず、第Ⅰ部の議論を踏まえつつ、言説編成の中で形成され行く作家

像（作家表象）を太宰が作品に取り込み返すさまを作品（テキスト）の分析を通じてたどり返す《論の展開を指摘し、《第Ⅱ部内部において、また第Ⅰ部との間に一貫性と連続性を確保している》と、研究書としての一貫性も評価していく。つまりは、B・Cを評してAに至り、そしてDへと及ぶ。

方法論的には、言説分析、テキスト構造分析など、今日私たち研究者が活用できる方法を巧みに組み合わせたものとなっている。とりわけ第Ⅰ部での数多の同時代言説の紹介・分析に接して、「略」作品を圍繞する同時代言説を網羅的に通読する中で見えて来る作品の時代性・歴史性を把握しようとする努力には強い共感を覚えた。

その上で、《文学研究上の志向の違いも感じさせられる》として《太宰神話》批判のために著者が《実体的な太宰治》を想定することを厳しく退ける点》を問題化する。《実体的な作者とは別の機能としての作者を想定して読むべきだというバルト、フーコー、エーコを経た今日の文学研究の基本姿勢を共有している》という〔1③〕では、しかし《それは分析・議論のための仮説的な作業》にとどめるべきものとされ、《無暗に振り回せば独断論になるだけ》だと運用のレベルで批判していく。さらに、《同じ問題に絡んで、著者は太宰の生涯と太宰の作品の《混同》こそは太宰研究最大の難問<sup>アポリア</sup>》と記すが、はたしてそうだろうか》と疑義を呈し、《論じ方にある種の制約を課すことで議論の運びに先鋭さが生まれるのは確かで、そのことがこの書のパフォーマンス面での魅力の重要な支えとなっていることは間違いない》としながらも、より柔軟な姿勢・発想に基づいて、

編著『太宰治をおもしろく読む方法』（風媒社、二〇〇六・九）を具体例として提示しながら『太宰作品をいろいろな角度から楽しんで欲しい』と、その立場をクリアに表明している。

つまり、〔1③〕では著1への理解・共感を示しながらも、Dについては容易にこえられない『文学研究上の志向の違い』<sup>(14)</sup>が幾重にも言明されており、これらを勘案してAも捉えるべきだと思われる。逆にいえば、〔1③〕・〔1⑥〕では、B（とA）・Dに関して著1を高く評価しながらも、それと同時にEについてはそのいきずき、を難じており、両者の論理構成は相似形を描く（Eの批判がA/B/Cいずれを特に対象としたものかは判断不可能）。ただし著1をめぐる書評言説を見渡しても、『それ「山内祥史氏や相馬正一氏による詳細な年譜・伝記的調査」をきちんと踏まえれば格別躍起にならなくても』太宰神話のかなりの部分は容易に相対化されるはず』だという〔1③〕の研究状況認識が共有されていたわけではなく、（当の著1は措くとしても）こと〔1②〕、〔1⑤〕とは食い違いをみせる。こうした認識の径庭が、AやEを言表する際、各書評に反映されるのは当然だろう。

精確な読みとりが困難な文体で書かれた〔1④〕も、おそらくは〔1③〕・〔1⑥〕と類似した著1への見方・評価を示したものと読める。著1の主にDに関わる言明を『いかにも新しい声』として、『太宰愛読者の位置から己れを（引き剥がそう）と苦闘した人々の肉声とは無縁の、硬質な響きをもったものと聞こえる』と、作者論を参照枠として起動しながら、〔1⑤〕では次のようにして同書の主にA・B・Eに関わる局面に論及していく。

着実な読解は個々の読者自身の〈引き剥がし〉をはじめとする読みの動きの中からこそ生まれると信じるの

である。だが、なおかつ太宰治という圧倒的な読者を擁する作家・作品の解明にあたっては、〈引き剥がし〉こそが第一義だとしてその外部（と見える）の圧倒的な読みのひろがりや、作者その人の生にからまる幻想構築を単なる虚像として切り捨てることが、果たして太宰研究の自明の方向であろうかと疑うのである。

〔略〕その意味で、本書第一部の、昭和十年代各時期における太宰治イメージの発生研究はまさに有意味である。松本氏は、丹念に文壇登場期からの太宰受容、作家イメージ生成の過程を追ひ、それらを作品群と時代、作家と読者、言葉と社会の関係性のひろがりの中で見据えることを説いている。私は、そうしたイメージ群の動き自体が、太宰文学の特徴的なひろがりとして見なおされ、単一ではない作家像として重視されるべきと考えるのである。

ここには、著1の論旨を汲みながら創造的な読みかえも同時に展開されており注意が必要だが、Eを排しつつBに関しては《単一ではない作家像》が描きだされる限りに対して評価している（もとより、他の書評にも読まれる通り、松本が「I」で歴史的に描きだした《作家像》は、二択でいうならば単一だと思われるが）。つまりは、Bを《有意味》としたのも、ごく限定的な条件下においてであって、その意味では同書への評価は〔1③〕や〔1⑥〕よりも厳しいものと判じられる。なお、〔1④〕の著1に対する評価は、Dに関する議論を通してクリアに示される。《なぜ太宰の場合、作家像とのつながりがかくも警戒されるのか》と、作者論に関わる問題提起をしながら、《まさに、そこにこそ太宰研究の危険に満ち、なお豊かな可能性の場があるのではないか》と自らの立場を表明する。もとより、『凡常の発見 漱石・谷崎・太宰』（明治書院、一九九六・二）、『太宰治』（岩

波書店、一九九八・五)<sup>15)</sup>の著者による書評である。してみれば、(神話的な太宰治読解も含めた)読みの多様性といった《艶やかな動き》が《太宰研究の精密化、厳密化にひそむ硬直化とは別方向にあるのではないか、と私には思われてならない》と言明するのも至当ではある。

最後に、すでにDをめぐる著1への批判的言表は検討してきたが、その他の同書に対する注文／期待／要望の類いを確認しておく。一つは、同書の検討対象(範囲)外のもので、「I②」の《戦後期、さらに現在にいたるまでを視野におさめた〈太宰治〉の生成論を期待したい》という言葉がそれにあたる。他に、同書の射程圏内において、「I①」では《青年》という問題が、同時代において他のいかなる言説群の間に位置づけられ、またそこに太宰がどう絡むのか》、《青年》の「病」の一つとして、プロレタリア文学の破産を経た「表象の危機」という概念が論じられている》ことをふまえて、《この「危機」の、テクストレベルにおける寄与は何か》といった検討課題が提示されている。また、近似した興味から、「I⑥」では《従来「自我の解体」「自意識過剰」などとも言われてきたこの時期固有の「表象」をめぐる問題系を、検閲の問題なども念頭に置きながら、たとえば第一部で駆使されている言説分析の手法によって具体的に浮き彫りにすること》が望まれている。

ここまでの、著1をめぐる言説の特徴を、傍線を付したレトリックも含めてまとめておこう。まず、賛否も含めて言表が集中したのは「I」の議論および方法論(B・DおよびE)についてであった。同時代資料の調査・分析をベースとした言説分析によって、太宰治なる作家表象(〈太宰治〉)を歴史的に記述したパートについては、理論的設定、手続き、成果、いずれも研究上の意義が評価された。その議論に連動するかたちで、テクスト分析によった「II」(および「III」)の議論(C)も、研究書としての一貫したコンセプトを構成するパートと捉えら

れた。ただし、作者論に関しては、一方で禁欲的・限定的と称された理論的設定が、太宰治研究の現状に対して有効だという判断と、太宰治（研究）に孕まれる豊かな可能性を取り逃すものだという判断とが言表された。

従って、賛否いずれにせよ、こうした局面では著1を媒介に、言表主体（＝書評の書き手）が自らの作者論に関わる研究観を示すことにもなった。Eに関する理論的設定が「I」および全体を性格づけている著1である以上、この論点に対する批判は致命傷になりかねないのだが、しかし、そうした場合でも、不思議と著1全体への評価が劇的に下がることはなかった。それは、著1について指摘された（主に言説分析に関わる議論の）説得力・精密さ・実証性・情報量によるものだと思われる。こうした分裂的な様相は、「1⑥」に典型的にみてとれるが、「1③」・「1④」も同様の言説構成となっている。してみれば、こうした受容を強いる強度が著1にあつたはずで、これこそが《力技》（1①）と評されたゆえんかもしれない。

最後に、近代文学研究／太宰治研究（史）という視座から、著1による貢献として言表されたポイントをまとめておく。第一に、特定の作家・特定の時期、つまりは昭和一〇年前後の太宰治に限られてはいたものの、著1を通して改めて作者論について実践的なかたちで問い（異議申し立て）を提出したこと。第二に、いささか窮屈な理論的設定を構えることで、同時代の視座・文脈を視野に収めた研究として、言説分析によって作家表象を問題化し得たこと。つけたせば、第一・第二の点とセットで、作家表象や同時代に配慮しながら、作品に自閉しないかたちでのテキスト分析を展開できたこと。いずれも、評価や意義の高／低には幅がみられたが、以上三点を著1による研究場への成果としてあげておく。

## IV

松本和也『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』（立教大学出版会、二〇一五・三）は、「あとがき」によれば、松本の《これまでの研究歴・興味関心を、ほぼそのまま書籍化した研究書となっている》という。また、第6章のベースとなった論文の発表を契機に、『キーコンセプトとなったのは「社会（性）」で、当時も今も、現代・日本・文学をめぐる状況を強く意識しながら、昭和一〇年代の文学場を、継続的に問題化することを目指してきた』（「あとがき」のだともいう（以下、同書を著2と略記する）。

著2の問題意識は、書き下ろしとして冒頭に配された「序——昭和一〇年代の文学場を考えるために」に、書評における争点ともなった《文学場》の定義と併せて示されている。

本書は、作家―作品―トピックからいえば、昭和一〇年（石川達三―「蒼氓」―題材）から昭和一七年（坂口安吾―「真珠」―九軍神）までを対象としている。その意味では、もちろん昭和一〇年代文学を研究対象としてはいるのだが、特定の作家―作品―トピックを対象として想定する文学史（研究）に対し、それらを取り囲む諸条件ごと組上に乗せたいという考えから、本書では昭和一〇年代の文学場を研究対象として設定した。ここにいる文学場とは、P・ブルデューによる《場 champ》という概念―アイディアに端を発するものだが、M・フーコーのいう《言説 discours》にもヒントを得て、本書の問題意識・方法に即して

アプロリエイト

流用したものへとアレンジしている。本書においては個別の作家・作品・トピックだけでなく、文壇といった時に想定される実体的な人間関係でもなく、それらを取り囲む批評言説やゴシップ、その水面下を流れる基底的な力学、さらには文学に直接的・間接的に関わる時局・歴史の動向などでもできるだけ視野に収め、それらが具体的な言表として産出・流通・（再）配置されていくフローの総体を指す鍵概念として、文学場という術語を用いたい。

より具体的なねらいと対象の捉え方については、次のような一節も読まれる。

もとより、死角のないアプロチなどないのだが、本書では、さまざまな作家・作品・トピックが文学場・言説において相関関係をもちつつ展開していく様相に照明を当てたい。その際、《文学》をはじめとしたジャンル・領域、あるいは作家・作品・トピックの価値や評価を前提とせず、それらもまた言説の動的な交渉によって形作られていく——そのような現象を同時代の視座を仮構しつつ記述しようというのが、本書のねらいである。

ここで著2の目次を掲げておく。なお、各章タイトルの末尾には、ベースとなった初出論文の発表年を西暦で付した（書き下ろしの場合は執筆年）。

序——昭和一〇年代の文学場を考へるために (2014)

## 第Ⅰ部

第1章 昭和一〇年代における題材と芥川賞——石川達三「蒼氓」(2002)

第2章 文学青年から芥川賞作家へ——小田嶽夫「城外」と支那 (2010)

第3章 不思議な暗合——『Sidotti 物語』と太宰治「地球図」(2005/2010)

第4章 昭和一〇年前後の新人(言説)——雑誌『作品』と石川淳 (2011)

第5章 「高見順の時代」——「故旧忘れ得べき」と短編群 (2014)

第6章 昭和一〇年前後の私小説言説——文学(者)の社会性 (2003)

第7章 『リアリズム』のゆくえ——饒舌体・行動主義・報告文学<sup>ルポルタージュ</sup> (2007)

## 第Ⅱ部

第8章 〈現役作家＝太宰治〉へのまなざし (2009)

第9章 女流作家の隆盛／『喪の仕事』——「女生徒」(2010/2012)

第10章 ドイツ文化との共振／『権力強化の物語』——「走れメロス」(2009/2009)

第11章 新体制(言説)の中で菊を『作ること／売ること』——「清貧譚」(2013)

第12章 戦時下の青年／言葉の分裂——『新ハムレット』(2014)

第13章 『十二月八日』をいかに書くか——「十二月八日」(2004)

## 第Ⅲ部

- 第14章 昭和一〇年代における〈森鷗外〉——太宰治「女の決闘」から／＼ (2014)
- 第15章 日中戦争開戦直後・文学(者)の課題——小田嶽夫「泥河」・「ちすらひ」 (2013)
- 第16章 昭和一二年の報告文学言説——尾崎士郎『悲風千里』を視座として (2014)
- 第17章 戦場にいる文学者からのメッセージ——火野葦平「麦と兵隊」 (2005/2007)
- 第18章 富澤有為男『東洋』の場所——素材派・芸術派論争をめぐって (2008)
- 第19章 戦場を迂回すること——田中英光「鍋鶴」と太宰治「鷗」 (2012)
- 第20章 昭和一〇年代後半の歴史小説／私小説をめぐる言説 (2012)
- 第21章 坂口安吾「真珠」同時代受容の再点検 (2013)

同書について、まとまった分量をもつ書評としては以下の六本が確認できた。論述の便宜上、それぞれ2①～2⑥と略記し、引用に際しては亀甲括弧内に略記号を示す。

- 2①……大石紗都子「松本和也著『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』」(『太宰治スタディーズ』二〇一五・六)、四五～四七頁。
- 2②……中川成美「戦時下における文学活動の総体を思考する意欲的論考」(『週刊読書人』二〇一五・七・一三)、五面。
- 2③……安藤宏「松本和也著『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』」(『日本近代文学』

二〇一五・一一）、二五二～二五五頁。

2④……大原祐治「松本和也著『昭和一〇年代の文学場を考える——新人・太宰治・戦争文学』」（『日本文学』二〇一五・一二）、七八～七九頁。

2⑤……関谷一郎「松本和也著『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』」（『昭和文学研究』二〇一六・三）、二二二～二二四頁。

2⑥……平浩一「『文学場』をめぐる断想 松本和也著『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』」（『ゲストハウス』二〇一六・九）、一～四頁。

これら書評上で議論された論点は、主に、A「研究書全体（文学史としての評価）」、B「昭和一〇年代」という問題領域について、C「方法論としての言説分析／同時代評調査について」、D「第Ⅱ部評価について」、E『《文学場》の有用性／可能性について』の五点であった。著1に比して、論点がそれぞれ切りわけて記述されており、また、書評間における論点の重なりが大きいことも、著2をめぐる言説の大づかみな印象としては指摘できる。いずれにせよ、タイトルや「序——昭和一〇年代の文学場を考えるために」を通じての研究成果／問題提起は、再び正面から受けとめられ、書評において論及対象となっていた。

まずは、書評横断的に、A・Bに関わる論評／紹介を検討することから始めよう。

日本近代文学研究の蓄積を参照しながら著2を紹介していく（2①）は、『昭和十年代』という概念が、近代文学において、複雑なニュアンスを多分に含むことは論を俟たない」と前提した上で、著2を『太宰治を《基

(起)点とし(略)いわゆるこの時代に関する議論をより柔軟な視座に解放するべく、氏の在学中より以来の成果を集積した書》だと要約しつつ、《批評言説やゴシップを含めた当時の受容の実態、それらをとりまく気運が牽引した作家の創作環境にも着目しつつ、文学史を筋道立てる研究は、意外にもこれまでに注目されてこなかったのではないか》と、研究史上の隙間に著2を位置づける。(2②)でも、《多彩な作家の作品から、戦時下における文学活動の総体を思考しようとする意欲的な論考21編が収められている》と著2を紹介した上で、《まさしくそれは「昭和10年代」としか名づけえない作業であり、1930年代文学というような範疇では見えてこない独自の「文学場」が描出されている》と、その問題構成の特色を前景化しCにも及んでいる。《紛れもなく研究史に残る画期的な業績だと感じた》という評価から書きおこされる(2⑤)では、《同時代人としての平野が肉眼で見聞したものを実感的に語った文学史からは、平野の体温や哀楽は伝わってくるものの、距離が取れない同時代人としての限界が露わ》だと、「昭和一〇年代」という問題構成を平野謙という固有名に託し、《そう強く思わせてくれるほど、松本氏の達成には俯瞰的な見地から客観性を目差した考察が積み重ねられていて説得力がある》と著2を評価し、《本書は単に従来の文学史を緻密に叙述し直したに止まらず、文学史を《読み換え》てしまったと思えて驚いた》と、その成果を文学史(の読み換え)と位置づけている。BよりCにウェイトが置かれた(2③)からも引いておく。

本書は昭和一〇年から一七年の文学状況に関して、さまざまな作家、作品、トピックが相互に影響し合い、全体として大きなうねりを形成していく様態を明らかにしたものである。基本的には表象論の立場に立ち、

P・ブルデューの《場 champ》の概念などを参照しつつ、テキストそれ自体よりもテキストが同時代にどう評されたか、という言説群の検討を通して、そこに働く力学を抽出することがめざされている。

こうした〔2③〕における著2の評価は、《個々の作家、作品を実体としてではなく、表象として抽出するという、ある種明快な思い切り》を与件として、《『状況がどのように論じられていたかを論じる状況論』という、あらたな領域を切り開いた点は、高い評価に値する》と評され、また、《索引を用いてこの時期のエンサイクロペディアとして活用することが可能な、希有な成果》といった活用法までが提案されている。また、〔2④〕には《今後「昭和一〇年代」の文学について考えるようとする者が必ず参照するべき文献》だと、具体的な問題領域に関わらせた位置づけを示し、つまりはBを介してAが言表されている。

いわゆる書評とは異なる立ち位置から言表された〔2⑥〕では、著2のタイトルに掲げられた鍵概念である《文学場》に照準をあわせつつ、《この概念は少しずつ流通していったが、ことにこの一年、頻繁に耳にする（あるいは目にする）ようになった》として、《そのひとつの契機》として著2をあげ、《それほど、強い影響力、伝播力を持つ書》だと位置づけている。あるいは、〔2⑤〕にも、著2について《その「太宰研究の」延長で太宰に限らぬ昭和一〇年代の文学作品の背景（本書で言う「文学場」）を〈読む〉ことを試み、見事な成果をもたらした》という一節が読まれ、ここではB・CをふまえてAが言表されている。

こうした評価へと至るプロセスとして重視されたのは、議論が集中したCである。〔2①〕では、《文学場》を《一言に同時代コンテキストということにとどまらず、有機的・流動的な言表作用の総体を指し示す概念》と捉

えた上で、言説分析という術語を用いながら各部の要約が示されていた。〔2④〕でも、《考察の基本的立場は、文学に関する「言説」(M・フーコー)の徹底した分析によって、「昭和一〇年代」における「文学場」(P・ブルデュー)の様相を浮かび上がらせる、というもの》と要約されていた。それは、《松本氏が禁欲的に守ったのは、ある種の歴史主義的な決着との決別である》という〔2②〕が指摘するように、《歴史を見渡すことが可能な時点からの評釈を排し、同時代的な言説の中でいかような力学が働いてくるかを丁寧に見ている》という、歴史的視座の理論的設定とも関わる。

ただし、Cに関する言表の多くが注目していたのは、同時代資料の量である。《本書の第一の特色は、昭和一〇年代の文学の動向を一個の動態として、ダイナミックに見すえている点にある》という〔2③〕では、《こうしたダイナミズムを支えているのは数多くの同時代評に目配りをしている、その資料博搜のバイタリティ》だと指摘した上で、《『文芸時評大系』の刊行、新聞のデジタル化など、以前に比べて同時代評の調査はかなり容易になってきたが、本書は自力で膨大な資料が精査されており、それが個々の指摘に奥行きと説得力を与えている》と、《調査》・《精査》が特筆され、それが新たな研究領域の開拓につながったと評価していく。また、〔2④〕では、次のように《整理》の《手際》も注目される。

『文藝時評大系』(ゆまに書房)という便利な資料集成が整備されている今日、こうした「言説」へのアクセスはかつてに比べて格段によくなっている。しかし、膨大な資料を通観し、手際よく整理しながら「文学場」の配置図を示してみせることは決して容易なことではない。この点で、著者の仕事は日本近代文学研究

における「言説」分析的手法のお手本を示す（『文藝時評大系』の使い方）を示す？）ものだと言えるかもしれない。

その帰結として、第Ⅲ部について《膨大な分量にのぼる資料が数多く直接に引用されながら論が進められることとなるが、著者の論述は常に明晰であり、混乱するところがない》と、その《手際》が顕揚されていく。《ネット社会のお蔭で便利になったとはいえ、同時代評をチェックするにはとてつもない労力を要するであろう》と、やはり調査環境の変化にふれる〔2⑤〕では、《しかし膨大な量であろうが資料を漁るには時間と根気があれば済むことであり、その結果を冗漫にまとめるだけなら誰にでもできることだ》、《ところが先学が素通りした資料の問題点を問い直す能力が無ければ、文学史を〈読み換え〉ることなど不可能だ》と、単純な作業と《能力》を峻別した上で、《昭和文学の一時期とはいえ、松本氏は若くしてそれ「文学史の〈読み換え〉」を目の前でやって見せてくれたわけである》と、ここでは調査環境や利便性の向上に還元されない《能力》までが言表・評価されてはいた。

こうした評価に疑義を呈したのは〔2⑥〕である。著2「序」での《文学場》定義の際に、《「言説」という言葉強調するのは、正直なところ、非常に損な気がした》、《どうしても、「言説分析」というイメージばかりが強まってしまい、そこが前景化されてしまうからだ》と、定義・受容に関わるアクセントを問題化する〔2⑥〕には次の言表がみられる。

同書を「言説研究」、「言説分析」として高く評価する向きもあり、実際に、同書がそうした側面を多く内包しているのも確かであろう。ただし、「言説分析」という言葉が強い意味を持ちすぎ、同書について、その「情報収集（能力）」が、あまりにも前景化・評価されすぎているような心象を思い浮かべ、そこにもまた、やや違和感を抱く。

こうした言表を通して「2⑥」は、著2のウエイトを《文学場》へとスライドさせようとする。もとより、Eについては他の書評でも、それぞれのかたちで論及対象とはなっていた。その検討に先立ち、Eの前提の一部を成す、Dに関する言表も検討しておこう。

「2①」では、《太宰作品を昭和一〇年代の《文学場》に鑑み、それが時局的なものへの追隨を「反転」させ、ひそかな「抵抗」たりえた高度なテキストであることも本書において鮮やかに論じられている》という著2第Ⅱ部の紹介につづき、《特に10章で顧みられている『走れメロス』の典拠や文献の同時代的位置づけへの着目は、近代文学研究全体においても重要な問題提起だと感じた》と言表されている。同様の評価は、やはり第Ⅱ部について《テキストを丁寧に読解しつつ、それぞれのテキストを構成する言葉と「文学場」内外の時代状況、社会状況とが連接するさまを、著者は鮮やかに浮かび上がらせる》と紹介される「2④」においても、第10章が《本書全体の白眉》とまで位置づけられている。

これに対して、「2③」では、《状況論とテキスト分析との照合が試みられ》た第Ⅱ部の議論に《関心》がよせられながら、《必ずしも十分な成果を上げているとは思えなかった》と判じられ、その内実について《総じて状

説論からテキストを見てしまう傾向と、先行論との差別化への過度のこだわりが、ともすれば物語内容のとらえ方を偏頗なものにしてしまっている印象を受ける」と言表された。Dは、最も大きく評価が割れたポイントである。

Cと関わりつつ、もう一つの争点となったのはEである。その一つの極は《著者が本書のなかで「文学場」という言葉を使うとき、それは「文壇」という語で置き換え不可能な形で用いられていたのだろうか、という一抹の疑問》を呈した〔2④〕である。

著者の態度は一貫して「文学場」のなかからの内部観測として膨大な「言説」と向き合うというものであった。しかし、その結果として「文学場」とその他の「場」との相関は見えにくくなり、著者の叙述はいわゆる「文壇史」のようなものに近づいていく〔略〕。換言すれば、著者の叙述はしばしば、旧来の文学史叙述の相対化というよりは、むしろ精密化といった方に傾いている。

叙述の《精密化》が《「文壇史」》へと至る道筋は、著2が《表象論の立場》（〔2③〕）によるものと評されていたことと考えあわせればなおのこと、説明がなく理解が困難だが、《緻密》な叙述が文学史の《読み換え》と捉えられていた〔2⑤〕とも好対照をなす。

また、《文学場》という語義自体も改めて問われた。もとより、書評言説全体としては、著者＝松本が付した《流用》<sup>アプロプリエイト</sup>という一語もあつてか、大方（好意的にというよりは）肯定的に捉えられたようだが、〔2⑥〕では、

ブルデューから日本近代文学研究領域での用法などが確認される。ブルデューが示した原義に比して『経済的秩序』という観点がやや軽視されているのではないか、等々——と、あり得べき批判を想定しつつ、しかし『そうした批判にも違和感を抱く』として、次のような方向で活用の『道』が提案された。

「昭和一〇年代の文学場を考える」という、やや口語的な標題。この場合の「考える」は、言うまでもなく、「昭和一〇年代の文学場」というフレーズに掛かっていると同時に、「文学場」というタームにも掛かっている。「文学場」という概念を、もちろん、近現代の日本文学研究という「場」(champ/field)において、ブルデューの本当の意図どおりに当てはめる必要はないだろうし、そもそも、それ自体が困難であろう。むしろ、あらためて「文学場」とは何であるのか、それを問い続けること自体が、特に今後、なんらかの研究の道をきりひらいていく。

著2に関するこうした読解は、実はすでに〔2①〕と〔2②〕で展開されていた。〔2①〕においては、次のようにして著2を踏切板として『文学場』の有用性が言表されている。

本書を通じて、時にことばがことばを呼び流動する、言表空間としての『文学場』を想定することは、昭和一〇年代の当事者たちが図らずもとらわれてきた観念的な制約を浮き彫りにするだけでなく、その時代の可能性を洗い直すことにもつながるのではないか。

より具体的・積極的な読解を示したのは〔2②〕である。《ここには小説家の主体に寄り添いながら「時代の要請をいかに表出するか」ということを深く意識した思考の過程がみられる》として、著2を《松本氏自身の「文学場」探索の実践的な試みと読むことが可能だ》と位置づけるにとどまらず、《なぜ人間は国家に籠絡されていくのかという極めて根幹的な疑義を氏は「文学場」という設定の中に込めたこと》を、《本書の通読のなかから感知した》と、著2の《文学場》は積極的に解釈され、その読解成果が言表されてもいた。

最後に、すでにC・D・Eに関する著2への批判的言表は検討してきたが、その他の同書に対する注文／期待／要望の類いを確認しておく。一つはBに関わるもので、〔2②〕では《期待を込めた注文》として、《本書が昭和10年代という基軸を持つことによって可能となった文脈を、1930年代40年代の世界史的なコンテクストの中に位置付けた時に見えてくるものの大きさに期待は高まる》と、視座の変換・拡大が求められている。もう一つは、著2のB・Eを前提としながら、やはり対象の限定性を難じ、論及すべき問題領域を提示する言表である。〔2③〕では、《視野に入れた方がよい》ものとして《芥川賞選考にまつわる政治性、「文学界」と「人民文庫」との水面下の対立》、《内務省の検閲のあり方と、それを「文学」の側が自主規制的に内面化してしまふ様態》、《『新潮』『文藝』等の主要誌の、「国策」をめぐる質的転換》、《『現地報告』『改造時局版』などの性格、婦人雑誌などの動向》、《『文藝文化』を中心とする国文学の動向、京都学派など周辺領域との関係、「外地」の「文壇」の動向》があげられている。さらに、〔2④〕では、《韻文の問題、あるいは外国文学や古典文学に関するアカデミズムの問題など》、〔2⑤〕では、《『詩歌』と『演劇』がそれぞれあげられている。いずれも、昭和一〇年代の

《文学場》という著2の問題構成（の広さ）ゆえに喚起された面も大きいと思われる。

以下、著2をめぐる言説の特徴を、傍線を付したレトリックも含めてまとめておこう。

まず、著2についての評価は、総じて肯定的なもので、昭和一〇年代という時期、《文学場》という観点からの議論に限定されたものではあるが、当該領域において高い評価を得た。ただし、その受けとめ方には振幅がみられた——（読み換えられた）文学史、文壇史、メタ状況論とった位置―意味づけである。また、視座を同時代に設定した点、言表レベルにのみ照準を合わせた点（《表象論》〔2③〕）など、著1にも通ずる限定的・禁欲的な構え（理論的設定）は、著2においては、総じて方法的な一貫性・立場として評価された。

このように著2総体の評価の内実は多様であったにも関わらず、第二に、著2に対する評価ポイントは集中していた。つまり、同時代評調査の量／言説分析の質が高く評価され、それが言説上では視座の全体性、俯瞰性、総合性といったレトリックによって評されていた。ただし、この点についても細かくみればそれぞれの立場は異なっていた。つまり、資料／言説分析に対する質／量いずれを重んじるかによって、著2をどのような評価軸で評していたかが問わず語りに示されており、これが著2評価の振幅と連動している。

第三として、第Ⅱ部については、著2に関して最も大きく評価が割れたポイントであった。作家表象としての〈太宰治〉という限られた言説から太宰治テキストを読んだ著1に比して、著2ではテキストの発表時期および内容に即した言説との切り結びが、それぞれに論じられようとしていた。そのため、太宰治テキストと言説の組みあわせによって、テキスト解釈／論の妥当性・説得性が異なっている。もとより、単に各章の出来にもよるのだろうが、各書評の前提を掘りさげてみれば、おおむね批判的な言表はテキスト解釈を優先しており、肯定的な

言表はテキストの自律的な解釈（姿勢）への批判を（多かれ少なかれ）擁していたようである。いわば、言表主体（＝書評の書き手）の文学研究に関する諸要素・対象の優先順位や評価軸（価値観）が、自動的オートマチックに示される局面でもあったのだ。

第四として、『文学場』という鍵概念を掲げた、大部の研究書であることに由来すると思しき言表の動きも観察された。それは一面、すでに論及した注文／期待／要望が、多岐にわたって提出されたことである。その反面、個別（各章）のテーマについて、十分な検討を展開した書評はみられなかった。もとより、著2の分量、紙幅、評すべき他の論点があったことは明らかであるし、すでに検証してきたDの他、『2①』では第6章が、『2③』では第4章、第6章、第17章、第20章が、『2⑤』では第7章が組上に載せられてはいた。それでも、日本近代文学研究において論じられる機会の少ない、小田嶽夫、尾崎士郎、富澤有為男<sup>16</sup>についてふみこんだ論及はみられず、ここでも迂回が演じられたことは、著2書評言説の特徴の一つ／研究場の性格を示す一例として、やはり銘記しておくべきだろう。

最後に、近代文学研究／「昭和一〇年代」（文学史）という視座から、著2による貢献として言表されたポイントをまとめておく。第一に、同時代言説の調査を通じた言説分析によって「文学場」を問題化するという実践（の集積）を通じて、『文学場』という鍵概念を導入＝提示したことがあげられる。その内実の解釈（位置・意味づけ）は多様ながら、その成果は、併せて「昭和一〇年代」（文学史）が研究対象として有意かつ重要であることとの承認ともなっており、『序』で論及された先行研究状況に照らせば）こうした問題領域の再提示も果たされたことになり、これが第二のポイントである。いわば、研究方法、研究対象それぞれについて、著2は新たな／

改めての異議申し立てを果たしたことになる。第三として、評価が割れた第Ⅱ部をめぐる言表（の争闘）を通じて、文学作品（テキスト）とは何か、という根源的な問いが、文化研究導入以後において改めて問われた。著1「Ⅱ」の延長線上の議論になるが、テキスト分析に際して、コンテキストをどのように参照し、議論にとりこむのか、あるいは、そもそも研究の始点としてテキスト／コンテキストいずれを中心に検討対象とみなすのか、そこに関わる論者の価値づけなど、著2をめぐる争点とはやや離れた地点から、しかしその急所に関わる問題提起がみられた。いずれの点についても、クリアで説得的とされた著2の方法・立場・議論について、評価の振幅はみられたが、書評言説の検討からは、右の三点を著2による研究場への成果としてあげておく。

#### Ⅳ

本稿における当初の企図は、前節までに一通り果たされた。

その上で、贅言めくが、本節では人文学―（日本近代）文学をめぐる研究環境および著1・著2間の比較などについて、少しく書きそえておきたい。

まず、現実的な背景を確認しておきたい。著1・著2が刊行された時期に、松本和也は信州大学人文学部に所属していた。国立大学法人への移行は二〇〇四年四月に実施されたが、松本は二〇〇七年一〇月、つまり第一期中期目標（二〇〇四年度―二〇〇九年度）の半ばに地方国立大学にポストを得て、第二期中期目標（二〇一〇年度―二〇一五年度）いっぱいまで在職し、その間に著1・著2を刊行したことになる。この間、こと第二期終盤

の、大学－人文系諸学に対する社会的な風当たりが現場にどのような影響をもたらしたか／もたらしつつあるかについては、少なからぬ議論<sup>17</sup>が展開されてきたが、大学－人文系諸学の社会的有用性（市場価値）が厳しく問われつづけた時期であることは確認しておく。

ただし、別のところで松本が言表しているように、文学の社会化の要請は、昭和一〇年代の文学場で展開されていた言説の《反復》<sup>18</sup>とも見立て得る。従って、著1・著2は、研究環境の変化をうけて文化研究へとシフトしたと語られる二〇〇年前後の研究動向の、単なる延長線上では捉えられない。仮にそうした動向があったとして、それが一段落した後、さらなる変化の渦中で、昭和一〇年代／現代を折り重ねるようにして、つまりは大学行政の影響力が飛躍的に大きくなる研究場において、二〇〇〇年代に研究者として成型された松本によって、著1・著2は産出されていった。おそらく、書評言説に散見された、厳密さ／窮屈さ（豊かさやおもしろさの封殺）とそのことは無縁ではないだろう。

翻つてみれば、著1と著2の間には六年の歳月が流れており、研究対象はもとより研究書としてのコンセプトも異なる。本論で扱ってきた書評言説から、二著の比較もしておく。

まず、著1から著2にかけて、当初からみられた、《研究の関心が、個別の作家や作品に求心的に向かうのではなく、歴史や時代状況のコンテキストの中で作品を読もうとする方向に動いている》<sup>19</sup>という動向に共鳴した問題構成－研究対象－研究方法は、さらにおしすすめられたとみてよい。具体的には、作家の固有名がメインタイトルからサブタイトルへと移動し、検討対象期間も広がった。その意味では、旧来の文学研究とその自明の前提となっていた文学（研究）の価値を、積極的に疑いながら、にもかかわらず／それゆえに価値づけようという著

1での試みは、著2においてさらに積極的に展開されたことになる。

また、著1において争点となった論点Dの厳格なスタンスは、著2の書評では論及がなかった。著2第Ⅱ部では、著1「Ⅱ」と同種の議論が並べられていることを思えば、目だった変化といえる。この点については、問題構成の広がりとともに柔軟な姿勢に変じたということもかもしれないし、松本が『太宰治の自伝的小説を読みひらく「思ひ出」から『人間失格』まで』（立教大学出版会、二〇一一・三）において、同種の議論を全面的に展開し終えたゆえ、とも考えられる。もちろん、著2においても、第Ⅱ部を中心としたテキスト分析において、同時代コンテキスト／言説は積極的に導入しながら、作家主体を立ちあげたり、分析成果の根拠を作家（情報）に求めるということは、徹底して排されてはいた。

最後に、著2の検討対象期間にふれて、本稿を閉じることとしたい。タイトルには「昭和一〇年代」と掲げられてはいるが、直接的に扱われた下限は昭和一七年である。一つには、著1を出発点とする松本の研究が、時代を下るかたちで展開されてきたことの帰結であり、つまり今回研究が進んだのは昭和一七年までである、という見方である。ただし、松本の方法論からすれば、物質的に言表が産出されていることが研究の与件でもあるはずで、昭和一〇年代末とは、その意味で研究しにくい／できない時期であるとも考えられる。著2をめぐる論点Cに関わらせていえば、創作の発表はつづいているものの、調査すべき同時代評がそもそも存在せず、『文学場』を想定すること自体が困難な時期が訪れるのだ。

著2「あとがき」によれば、松本は著2を『道標』として『今後も同様のテーマにおいて研究を進めていく』ことを企図しているようだが、本稿Ⅲ・Ⅳ末でふれた課題にくわえ、こうした質を異にした難題もまた、「昭和

一〇年代」研究を進めていく以上、何かしらの解決が要請されよう。すでに始められた文芸時評のサーベイは、その第一歩ともみえる。<sup>(20)</sup>

※本稿Ⅱ・Ⅲの議論の一部は、二〇一二年度日本近代文学会一二月例会における報告「いま、あしもとから考えるために」(二〇一一・一一・二四、於共立女子大学)の一部をベースとして大幅な修正をくわえたものです。なお、本研究はJSPS 科研費 15K02243 の助成を受けたものです。

## 注

- (1) 木村小夜「研究案内」(安藤宏編『展望 太宰治』二〇〇九・六)他参照。
- (2) 同書に結実した山内祥史の仕事により、本稿Ⅳでたびたび言及される『文藝時評大系』以前に、太宰治研究においては同時代評へのアクセスは容易となっていた。
- (3) 本稿では、三人称として「松本和也」を対象化し、公表された情報のみを提示する。
- (4) 曾根博義「日本文学」(近代)研究'97」(『平成十年版 文藝年鑑』新潮社、一九九八・七)
- (5) 誤記かと思われるが親文字の「文学研究」は原文ママ。
- (6) 東郷克美「日本文学」(近代)研究'99」(『平成十二年版 文藝年鑑』新潮社、二〇〇〇・七)
- (7) 東郷克美「日本文学」(近代)研究'00」(『平成十三年版 文藝年鑑』新潮社、二〇〇一・七)
- (8) 安藤宏「日本文学」(近代)研究'01」(『平成十四年版 文藝年鑑』新潮社、二〇〇二・七)
- (9) 安藤宏「日本文学」(近代)研究'02」(『平成十五年版 文藝年鑑』新潮社、二〇〇三・七)

- (10) 紅野謙介「日本文学（近代）研究'04」（平成十七年版 文藝年鑑）新潮社、二〇〇五・七）
- (11) 鈴木貞美「日本文学（近代）研究'05」（平成十八年版 文藝年鑑）新潮社、二〇〇六・六）
- (12) 池内輝雄「日本文学（近代）研究'09」（平成二十二年版 文藝年鑑）新潮社、二〇一〇・六）
- (13) 本稿では、ロラン・バルトやウンベルト・エーコらが近代文学研究に再考を迫った、作品解釈に際しての特権的な作者（の意図）の捉え方をめぐる一連の議論をゆるやかにカバーするねらいで、便宜的に作者論と総称しておく。三好行雄・蓮實重彦「作者」とは何か」（『国文学』一九九〇・六、中村三春「作者論」（日本近代文学会編『日本近代文学研究の方法』ひつじ書房、二〇一六・一一）他参照。
- (14) 『大宰治をおもしろく読む方法』を『文学研究上の志向の違い』を議論する際の手がかりとするのが適当か判断に迷ったが、「1③」の文脈を考慮してそのように扱った。
- (15) 同書には、次の一節が読まれる。——《『人間失格』（展望）一九四八・六―八）は、多くの読者によって、作者自身の人生と重ね合わせで読まれてきました。しかし、題名からして大仰な『人間失格』はどうもつくりもの臭い、と感じる読者も多いのです。それゆえ、大人たちはうぶな読者の「ナイーブな読み」をあやぶんで、作品と作家を混同してはならない、あくまで自立した小説として読むべきだ、と警告を發します。しかしよく見れば、作中人物と作者をだぶらせて読むことは、作品の上ではなんら拒まれてはいません。むしろ、そうした素朴で熱心な読みは歓迎され、また、たくみに誘導されているかのように見えます。いわば、『人間失格』は作者その人の半生と思って読ませてくれる作品なのです。》
- (16) 「2⑥」に第18章への論及がみられるが、ここという検討（評価）ではない。
- (17) 室井尚『文系学部解体』（角川新書、二〇一五・一二）、「特集Ⅱ大学の終焉——人文学の消滅」（『現代思想』二〇一五・一一）、「特集Ⅲ大学のリアル——人文学と軍産学共同のゆくえ」（『現代思想』二〇一六・一一）他参照。
- (18) 松本和也『新刊本自著紹介『昭和一〇年代の文学場を考える——新人・太宰治・戦争文学』（『立教』二〇一五・夏）
- (19) 注（6）に同じ。

- (20) 松本和也「昭和10年代における文芸時評（Ⅰ）——総合雑誌『中央公論』『改造』『文藝春秋』『日本評論』（『人文学研究所報』二〇一七・三）、同「昭和10年代における文芸時評（Ⅱ）——文芸雑誌『新潮』『文藝』『文学界』『若草』『作品』『文学者』（同前、二〇一七・九）参照。